CURES Salon

或る読書体験のこと

林　宥一

1995年夏、母が住み慣れたふるさとの病院で死んだ。死の直前、彼女は最後の苦しみの中で、「お棺の中には小さな花と聖書を入れてね」と言った。この願望は、「花は派手なのではなく小さいのを」、「聖書は私の座卓の抽出に入っている小さいのを」と、繰り返し伝えられた。それは、終生人目につく所業を好まなかった彼女の生き方にふさわしい、ささやかな願望のように、私は思われた。長年使っていた母の座卓の抽出の中には、確かに、手のひらにのるような小さな聖書が置かれてあった。大変古い、1920年代に刊行された1冊だった。だがそれは、彼女が最も大切にしていたものであったらしい。

母が息を引き取ったのは、その数日後であった。遺体は、病院から座卓のある彼女の寝室に帰った。枕元にはその古い小さな聖書を置いた。翌日、葬儀屋が棺を持ってきた。私の心に迷いが生じたのは、遺体を棺に入れた直後のことであった。母の指定した聖書は、今では入手出来そうにもない歴史的に貴重なものだったからである。

私は歴史的文献や史料の大切さを教えられてきた歴史研究者のはしくれ。その「職業意識」が働いたらしい。私は、母が指定した貴重な聖書を手元に保存し、別な聖書を棺に入れようと考えたのである。彼女の寝室に、最近の「新共同訳」など新しい聖書が数冊あったことも、この考えを促した。私は、迷いつつその迷いを傍らにいた教会の司祭に伝えたのだが、司祭の言葉は明瞭だった。「お母さんの言われたとおりにしてあげなさい」。私に憑りついていた迷いが消えたのはこの言葉によってであった。私は「歴史研究」の名において、或は、生者の傲慢さで、死者の願いをふみにじろうとしていたようである。

歴史的文献・史料は歴史家が歴史を描くためになくてはならぬ道具である。だから、歴史家は誰でも、良い道具としての良い史料が欲しいという要求を持つ。だが、それ自体として正当なこの要求は、しばしば過去を占拠しようという所有欲となり、その結果、過去をあたかも自己のものにしたかのような錯覚を歴史家にもたらすことがある。歴史家の前に常に陥穽としてあるのは、過去と死者を壟断するそのような所有欲と錯覚である。

母の遺体を前にしてあの日に体験したことは、一瞬のことであったが、私にとって忘れられない思い出である。この思い出と重なって、私には、歴史の勉強を始めた頃に読んだ一冊の本の読書体験で刻まれた、もう一つの忘れられない思い出がある。それは、山崎朋子氏の『サンダカン八番娼館』(筑摩書房、1972年。その後、文春文庫）という本を読んだときのことである。

「底辺女性史」という副題がついているこの本は、「からゆきさん」と呼ばれた第二次大戦前の海外売春婦について書かれたもので、刊行当時、非常に大きな反響を呼んだ。それは、筆者の山崎氏みずから、天草で貧しい老後を送っていた「元からゆきさん」の生活にとびこみ、彼女のなかに奥深く秘められていた体験と心の有様を、「聞き書き」というかたちでみごとに描いたものであったからであ

る。山本茂美氏の『ああ野麦峠』などとともに、戦後における最もすぐれた民衆史叙述の代表的作品である。私にとってもその読後感は鮮烈だった。その鮮烈さというのは、この本に綴り込まれた「元からゆきさん」の声から生じたものであったことは疑いのないことである。だが、私がこの本を読んで忘れがたい印象を持ったもうひとつの要因は、「元からゆきさん」の声の媒介者、すなわち著者山崎氏の「使命感」というものに関わっている。この本に次のような場面がある。

山崎氏がおフミさんという「元からゆきさん」の家を訪ねたときのことである。おフミさんは3年前に亡くなっていた。息子の松男さん夫妻が住んでいた。松男さんは、一冊の古びたアルバムを、「これがおっ母の写真ですたい。戸棚の奥のほうに入いとったけん、捜すのにひどう手間のかかった」と言って差し出した。そこには、サンダカン時代のおフミさんやその朋輩、サンダカンの街や港の写真があり、アルバムの中にはおフミさんの名を記したパスポートもはさまれていた。著者はその日、松男さんのすすめで、そこに一晩泊めてもらうことになる。だが、著者は床に入ってもアルバムのことが気になって眠れない――あのアルバムは、私が「見たい」と申し出たからこそ捜し出された。あすの朝わたしが帰れば、また押し入れの奥に投込まれ、再び陽の目をみないだろう。だが、あのアルバムは近代日本の女性史にとってこの上なく貴重な証言だ。わたしはなんとかしてこの写真の埋没を防ぎ、歴史の証言として世の中へ提出する義務があるのではないか、――著者は蒲団のなかでそのように考えながら重大な決意をする。写真とパスポートを盗みだそうという決意である。それは、泊めてくれた松男さん夫妻の恩を仇で返すことになるが、「埋もれたからゆきさんという歴史的存在の真実を生かすためには止むを得ない」。

だが、著者はこの決意をなかなか実行出来ない。なんども「今だ、今こそー」とみずからの心をはげますのだが、手が出ない。しかし、ついに彼女はその機会をとらえる。「おかみさんが朝食づくりに台所へ立ち、松男さんが洗面に立ったすきに、わたしはアルバムをみるふりをしながら、どうしても欲しいと思った写真数葉を必死ではがし、二通のパスポートと合わせて、着物の下、胸元に押しこんでしまったのである」。

この場面はまだ続く。山崎氏が出立の身仕度をしていたとき、松男さんが、「どれ、こりばしまっておかにゃならん」とアルバムを手に取りぱらぱらとページをめくった。写真をはぎ取った跡は歴然としている。パスポートもない。「あ、写真が…パスポートも」と松男さんは口ごもり、山崎氏を見る。だが不思議なことに、松男さんは彼女に何事も言わない。著者は別れの挨拶をしてバス停へ急ぐ。「写真とパスポートが胸の隆起のあいだでがさがさと揺れ、その角が当たって痛かったが、しかしわたしの胸の内側には、それよりももっと鋭い痛み－とうとう罪を犯してしまったという痛みが走っていた。…わたしは、自分の手足は言うまでもなく、全身がこまかくふるえていてどうしても止まらないのに気づいた」。

『サンダカン八番娼館』について忘れられない思い出があるというのは、特にこの場面に関わっている。この本は、その後、底辺民衆史の記念碑作品となった。山崎氏が、迷いつつも「重大な決意」をもって盗みだしたあの写真やパスポートも紹介されている。「わたしは何とかしてこれらの写真の埋没を防ぎ、歴史の証言として世の中へ提出する義務があ

るのではないか」という彼女の使命感は、この本がベストセラーとして多くの人々に読まれることによって、果たされたといえる。

だが、私は、この本を読んでから20年以上たっているのだが、まだ山崎氏の「使命感」というものを理解できない。山崎氏は、次のように自問自答したのであった－松男さんは、あのとき私の非道な行為に気づきながら、なぜ知らぬふりをしてくれたのか。私は、心に秘めた目的を語ったことはないのだから、松男さんにわたしがなぜあの写真を欲しがるのかわかるはずはない。しかし彼はわたしを許してくれた。おそらく、「わたしが、その真実の姿をつかんで日本近代史のひとつの証言にしたいと願っているからゆきさん－そのからゆきさんを母としてこの世に生まれ、母にまさるとも劣らぬ苦しみをなめて今日まで生きて来た松男さんだからこそ、私の気持ちを直感的にとらえて、ただちにそれと諒恕してくれたのかもしれない。」

民衆史家としての山崎氏は人間的に誠実な人だと思う。だが、私はこの自己納得に違和感を禁じえない。しかも、この自己納得に何よりも特徴的なのは、そこに少しも亡きおフミさんが意識されていないことだ。彼女が盗みだした写真の主体は「元からゆきさん」のおフミさんなのだが、彼女が許しを乞うているのはおフミさんではない。内面での対話の相手はどこまでも今生きている松男さんやおかみさんなのである。日本には、住み慣れた家や故郷の野山には、死者の霊が宿っているという民衆信仰があった。そのような信仰からすれば、山崎氏が写真を盗みだすとき、或は、盗みだしたあとの罪悪感のうちに在って然るべきものは、死者のおフミさんが山崎氏の行為をどのように見ているかという意識である。もし、そのような意識が山崎氏を捉えていたのであれば、彼女はあの場面でおフミさんの写真を盗みだせなかったかもしれない。だがそのような意識は、この重大な場面の山崎氏には明らかに欠如している。そこに在るのは、おそらく経済成長と近代化が吹き飛ばしてしまったところの死者の霊などというものからは自由な、「近代的人間」としての山崎氏の姿である。だが、そうだとすれば、「今生きている私が堀り起こさなければ、死者は永遠に埋もれてしまう」という使命感とは、一体何であるか。

どうも、ここには、戦後の日本社会で激しく進行した「近代化」と民衆史研究者の使命感の間におけるパラドキシカルな関係という問題がありそうである。私自身は、ちょうどこの本が刊行された頃から、農民運動を中心に民衆史研究に接近したものの一人だが、接近しつつも、民衆史家のうちにしばしば見られる使命感（或はその根底にある歴史認識）に一方で共鳴しつつも、他方であと一歩近づきえない距離感をもってきた。だが、この「一歩」の問題はもう少し時間をかけてみないと解らないことなのかもしれない。ただ、この問題とは別にとりあえず言っておきたいのは、歴史家は史料ぬきには歴史を語りえないのだけれども、同時に、目に見えないものを見ようとし、耳に聞こえぬものを聴こうとする心を常に保持していなければならないのではないか、という単純なことである。

（金沢大学経済学部教授）